

KCELS

Newsletter No.6
MARCH 1991

KCELS第15回大会を終えて

泥谷 征人

今回、特別講師として日本英語学会初代会長、安井総東北大学名誉教授をお迎えして開催できたことは、当英文学会にとってこのうえない光栄であった。ご多忙のなか、私たちの集まりのために貴重な時間を割いて下さり、ご講演下さった安井教授に心からお礼申し上げるとともに、この大会の準備のためにご尽力下さった委員の先生方にお礼申し上げたい。

年に一度という地味な活動ではあるが、KCELSは今年で15回目の大会を迎えることができた。15回の積み重ねのなかで、当学会が会員相互の知的交流の場として定着してきた感じがあり、喜ばしい限りである。しかし、ここで歩みを止めてはならない。小規模ながら密度の濃い学会であるだけに、会員一人一人が寄せる期待は大きい。神戸女学院大学の特性を生かした魅力ある内容の学会に充実・発展させてゆく努力を、更に続けなければならない。

これからも会員の皆様の変わらぬご支援をお願いしたい。

曖昧な文について

東北大学名誉教授 安井 稔

英文が解釈できる、分かるというのは、いったい、どこまで意味を取ることができればそういえるのだろうか。曖昧な文をいくつかみることによって、どこまでがその英文の意味するところとして認められるのかを考えてみよう。

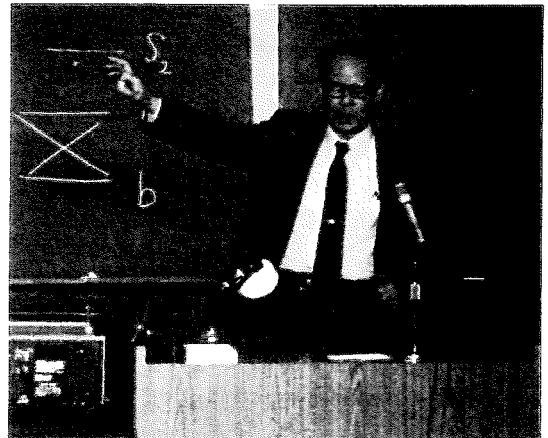
(1) The curry was hot.

(2) Mary is my sister.

例文(1)、(2)は文脈なしで日本語に訳そうとすると困る文である。しかし、例文(3)、(4)において、soで置き換えられている部分の意味を考えると、これら二つの文が異なる意味構造をもっているものであることが分かってくる。

(3) The curry was hot, and so was the tea.

(4) Mary is my sister, and so is Susan.



(3)においては、「カレーも紅茶も熱かった」、もしくは「辛かった」(後者の解釈は紅茶が辛いという場面が考えにくいため、通例は排除される)という二とおりの解釈しか与えられない。それに対して、(4)は、メアリーが姉でスーザンも姉、メアリーが妹でスーザンも妹という解釈に加えて、メアリーが姉でスーザンが妹、メアリーが妹でスーザンが姉という場面においても、それを正しく示す表現として用いることができる。英語において、soのような省略形が許されるのは、前に出てきたものと省略を受けるものが同じ意味を持つときに限られる。とすると、「熱い」と「辛い」は別の意味であるのに対し、「姉」と「妹」は英語においては別の意味としてはとらえられていないことが分かる。つまり、例文(1)は英語の文として曖昧 (ambiguous) であって、明確に異なる二つの解釈を持つものに対し、例文(2)は英語の文としては単に不明確 (vague)、つまり、切り込み方の少ない、はっきりしない文であるに過ぎず、曖昧な文とはいえないのである。sisterという語の場合には、日本語では「姉」と「妹」という二つの語があるため一見して曖昧な語ではないかと思われる。が、英語においてはkickが右足でできるのか左足でできるのかという点で曖昧ではなく、不明確であるというのと同様に、sisterは姉と妹に関して不明確であるにすぎない。

この省略形を用いた曖昧と不明確の区別のテストは、いくつかの文においてはかなり注意を要する。例えば、例文(5)が二とおり以上の解釈を許すかどうかということを考えてみることにしよう。

(5) John hit the wall, and so did Harry.

hitは「故意に打つ」という意味と、「うっかりぶつかる」という意味がある。これら二つは曖昧なのか、不明確なのかということである。この場合、HarryがJohnがへいぶつかったのを非常にうまくまねした場合、Harryの行為は故意であるからこの文は二とおり以上の解釈を許し、故にhitは曖昧ではなく不明確に過ぎないと言っている学者もある。しかし、言語というものは目に映るように場面・状況を述べるものである。このことは地球が自転していることを知っていても、「日が東から昇る」という言い方をするところからも明らかである。とすれば、(5)の例文において、Harryが非常にうまく真似をしたということは、目に映る限りHarryは故意ではなくぶつかったということになり、やはり二通りの解釈しか許さず、hitは不明確ではなく曖昧であるということになる。

語の意味が曖昧であるということ以外にも、(6)のようにどの部分に修飾が掛かるかということで文の意味が曖昧になることもある。

(6) My favorite girl's name is Margaret.

さらに英文の解釈において言外の意味をどこまで取りうるかということにも興味深い点がある。例えば(7)では

(7) Some of the boys went to the party.

手持ちの情報をわざと隠してはいけないという決まりからして、全員が行ったのではないことが言外に含まれているが、この言外の意味は後から訂正することは可能である。(7)のあとに“In fact, all of them went.”と加えても矛盾はしない。この英文が責任を持つのは何人か行ったということまでなのである。

仮定法の場合、if節については実際起こったかどうか文の意味として明らかにされるが、主文については、実現・非実現は、文の意味の責任ではない。

(8) If you started earlier, you would have been in time for the train.

この文では早く出発しなかったことは明らかであるが、列車に間に合ったかどうかまではこの文自体は責任を持たないというわけである。

次の(9)のような文にも注意が必要である。

(9) John broke the window with Mary.

この文の最も自然な解釈は「ジョンがメアリーといっしょに窓をこわした」というものであるが、メアリーをぶつけて窓をこわしたという解釈も、常識によって排除される不自然なものではあるが、この文の意味としては、はじめから排除されているわけではない。一方、次の(10)においては、notがhereに掛かるとすると、「私」は“ここ”にいないことになり、文の意味として矛盾が生ず

る。したがって、notがto不定詞に掛かる解釈だけが許されることになる。

(10) I'm not here to hear the lecture. (私がここに来ているのは講演を聞くためではない。)

次の(11)の例文においては、(2)とは逆に、日本語からみれば一つしか解釈を許されないように思われるが、the next Presidentが主語であるか補語であるかという構造的な曖昧性がある。

(11) Who is the next President?

この疑問文の答えとしては(12a, b)の二つが考えられる。

(12) a. John is the next President.

b. The next President is John.

このように意味的、構造的な曖昧性を考えてゆくと、一見なんでもないとと思われる英文の解釈に関しても、より慎重に、よりの確に、その文の、いわば、守備範囲に迫ってゆく必要性を感じさせる。

■研究発表

“Dejection : An Ode” に於ける Coleridge の崇高の概念について

和 気 節 子

Coleridgeは眼前の美の対象に永遠性の象徴である「全体」(allness)を感じ得たとき、その美の対象が崇高なものに変化すると考えていることが、1797年に“This Lime-Tree Bower My Prison”に付した説明や、*Table Talk* 及び *Marginalia* にみられる崇高の定義からわかる。Kant『判断力批判』に於ける「美と崇高の分析論」に多大の感銘を受けたにもかかわらず、Kantが美と崇高とを対立しあうものとして明確に区別したのに対し、Coleridgeは美と崇高との連続性を強調している。

1798年の兄George宛の手紙に、人々の感情を善に向かわしめる「生きた魂を植えつけられたような」美の描写が自らの詩作の目的であると書いたColeridgeであるが、1802年“Dejection : An Ode”の中で自らの詩的才能の喪失を嘆くに至る。創造主の似姿に作られた能動的な精神が「最も崇高なもの」とであるという、1801年に於ける自らの確信に基づいてColeridgeは、永遠の生命に漲る美しさである崇高の要素を能動的に作りだす意志を失った苦悩を“Dejection”に書きつけたのである。

Coleridgeはまず意志が働いて外界に美を発見し、意志が又、その美を崇高に発展させると考えるのであるが、このような意志の説明は従来までの批評には欠けている。*Biographia Literaria* 第13章に於ける第一と第二の想像力

の定義を用いると、“Dejection”の中で詩人は、「第一の想像力」が生みだす inanimate な対象を “excellently fair” といい、感覚的満足しか得られない自己を認識した失意を描いている。つまり Coleridge は、理性の世界にふれた歓び (Joy) を感じることによる道徳的向上を望む Kant のいう「自由意志」(free will) の欠如と、生命に満ちた美の、感覚で捉えた外界の美からの創造の為に「第二の想像力」を働かしめる F. Schelling の理論を反映した「意識的な意志」(conscious will) の欠如を “Dejection” に於いて嘆いていると考えられる。

Some Observations on English Modal Auxiliaries

Keiko Watanabe

This paper is devoted to an examination of English modals with special reference to 'can', 'may', and 'must'. My primary purpose in this paper is to analyze and explicate the meanings and uses of English modals from a pedagogical point of view. It is well known that English modals have been a constant stumbling block for Japanese students learning English. Part of the reason for this is that the English language has developed a rich and complicated system of modality, whereas the Japanese language has no such modal auxiliaries which are capable of definite distinctions of meaning. Thus, sentences such as 'It may rain tomorrow' or 'It might rain tomorrow' could not possibly be differentiated in Japanese, unless we have recourse to some longer phrases.

This paper deals with the distinction between two uses of English modals; that is, the distinction between the root (kongen-teki) and the epistemic (chinjutsukanwa-teki) uses of English modals. Although this distinction is quite widespread among linguists, it is not yet duly recognized among most of the Japanese writers of grammar books. Hofmann (1966) was one of the first who pointed out the distinction as relevant to English modals. The basic ideas are quickly reviewed and their relevance to teaching English as a foreign language (TEFL) in Japan is examined.

The distinction between root and epistemic uses of English modals is a valid one, and the meanings associated with these two categories are kept apart by distinct syntactic patterns. For each modal with epistemic meaning, it is possible to give a comprehensive definition such as

'It expresses the speaker's comment about asserting the truth of the proposition'. It is concerned with the speaker's assumption or assessment of possibilities and, in most cases, it indicates the speaker's confidence or lack of confidence in the truth of the proposition. The real meaning of modality, which is a judgement or an assessment made by the speaker on the gap between the proposition intended in the speaker's comment and the likely reality, is expressed not in root modals but in epistemic modals.

It is also possible to show that certain grammatical features are associated with epistemic modals: for example, negation affects the proposition and not the modality; there are no past tense forms (except in reported speech); the perfect infinitive is used to express the past, and as with negation, the occurrence of 'have + En' affects the proposition, not the modality; and the co-occurrence of the epistemic modals and certain syntactic forms, such as 'have + En' and 'be + Ing', distinguishes this category of modality from root modals.

There is still a great deal of work to be done on other features of modals, which are not dealt with in this paper. Although it is far from complete and further study is needed, this paper is intended to be at least a little contribution to EFL students to know how modal auxiliaries work in modern English.

キャンパスニュース

◎新院長就任

1990年10月、城崎進氏(元関西学院大学学長)が、神戸女学院院長に就任された。専門は聖書学。

◎大学院博士課程

1990年4月より、第1期生を迎え、順調にスタートした。

◎Regents College 夏期講習

1989年夏にスタートし、毎年夏に開かれるサマー・プログラムです。本学学部の学生を対象とし、約1カ月間、ロンドン Regents College における語学研修と文学講義を中心に、学生の海外体験と知識向上の足がかりとなるよう始められた。参加した学生の評判は上々。より多くの学生が留学、海外研修を望む傾向にあり、従来の Rockford College (米国) への留学生派遣と合わせ、より充実したプログラムへの発展をめざしている。

◎英文学科客員教授紹介

Richard Sears 教授 (米国 Kentucky 州 Berea College)

1990年9月より1年間、英文学科にて講義を担当されている。専門は19世紀英文学と film studies。夫人も非常勤で講義されている。

会 員 消 息

- **B. Coony 氏** (本学専任講師) ギリシヤ、テサロニキにて AILA (International Association of Applied Linguistics) 大会 (1990年4月) で研究発表。JALT (東京、11月) でも発表。
- **別府恵子氏** (本学教授) 米国カリフォルニア州サンディエゴで開催の American Literature Association 学会 (1990年5月) で研究発表。
- **平井雅子氏** (本学教授) フランス、Montpellier 市で開催された国際 D. H. Lawrence 学会 (1990年6月) で研究発表。
- **高瀬ふみ子氏** (本学教授) 米国セントルイス市で開催された Sixteenth Century Studies 学会 (1990年10月) で研究発表。日本比較文学会関西支部 (1990年6月) で研究発表。
- **原田園子氏** (本学助教授) 英語教育史学会 (1990年5月) にて「神戸女学院の英語教育」について研究発表。
- **正木芳子氏** (本学研究助手) 日本英語学会 (1990年11月) にて研究発表。
- **C. Seton 氏** (本学助教授) JALT 学会 (1990年11月) にて研究発表。
- **溝口薫氏** (本学専任講師) 米国カルフォルニア大学留学を終え、1990年9月帰国
- **A. Banerjee 氏** (本学教授) 本学より英国 Royal Holloway and Bedford New College に1990年9月から1年間留学。

会員による出版ご紹介

- **金城盛紀氏著**
『シェイクスピア花苑』1990年11月 世界思想社出版
- **A. Banerjee 氏編**
D. H. Lawrence's Poetry: Demon Liberated: A Collection of Primary and Secondary Material 1990年4月 Macmillan 社出版

KCELS Newsletter 編集委員

(第15回 KCELS 準備委員)

- B. Cooney • 泥谷 征人 • 平井 雅子
 - 本城 智子 • 上 紀子 (ABC順)
- 写真撮影 平井 雅子

KCELS Newsletter No.6

編集発行 神戸女学院大学英文学会

〒662 西宮市岡田山4-1

Tel (0798) 52-0955

振替口座番号 神戸 0-9323

KCELS 正会員募集

詳細は英文学科まで